

# 報告①

## 鞠智城の渡来系技術

講演者紹介

長谷部 善一（はせべ よしかず）

平成三年（一九九一年）四月に熊本県教育庁入庁。熊本県立装飾古墳館、熊本県教育庁文化課課長補佐を経て、令和四年（二〇三二年）四月より熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館館長。

# 「鞠智城の渡来系技術」

歴史公園鞠智城・温故創生館館長 長谷部 善一

## はじめに

鞠智城跡の保護施策は、昭和三十四年（一九五九年）の長者山礎石群、深迫門礎石の確認を受け「伝鞠智城跡」として県の史跡指定を皮切りに、昭和四〇年代の発掘調査成果を踏まえ、昭和五十一年（一九七六年）に鞠智城の位置が確定するに至り指定名称を「伝鞠智城跡」から「鞠智城跡」に変更した。

平成十六年（二〇〇四年）には国により「我が国の歴史を語るうえで重要な遺跡」として、国指定の史跡に指定され更なる高みによる保護が図られた。

本稿では、これらの保護の過程で明らかにされてきた古代山城としての鞠智城の価値を示す「渡来系技術」について、これまでの研究成果をもとに報告する。



## 一 鞠智城に遺る渡来系技術

鞠智城跡の発掘調査は昭和四十二年度（一九六七年度）の第一次調査以降、令和四年度（二〇二二年度）までで三十七次を数え、城門跡、土塁線、管理・行政機能を司る建物群を擁す平坦地と建物群、そして国内の古代山城では初めての確認事例となる貯水池など多くの調査成果が得られてきた。

ここでは、これまでの発掘調査の成果や、鞠智城シンポジウム及び鞠智城跡「特別研究」で、朝鮮半島に由来する渡来系技術として指摘されてきた各遺構について紹介し、この後の報告につなげたい。

### （一）選地

鞠智城は、菊池川沿いの菊池平野と内田川沿いの菊鹿盆地の両方向を望む位置に所在する。鞠智城が築城され役割を終える時期には、八世紀～九世紀代を中心に、鞠智城を望む地域に官衙的要素を有する遺跡が現在までに、四か所知られている。その他、全容は把握されていないが官衙的要素を有する可能性が高い遺跡として、掘立柱建物や火葬墓を確認している赤星福土遺跡（菊池市）、竪穴建物、掘立柱建物が確認され、越州窯系青磁が出土している赤星水溜遺跡（菊池市）がある。

そのうち鞠智城に最も近い位置には、土塁が巡り多量の布目瓦が出土する「菊池郡家」と推定される西寺遺跡（菊池市）、うてな台地南側斜面上に塔心礎が残り、西に金堂、北に講堂を持つ法起寺式の伽藍配置が推定され、さらに鴻臚館式瓦を出土する「菊池郡寺」と推定される十連寺跡（菊池市）、

官衙的要素の一つとされる「コ」の字に並ぶ掘立柱建物群の存在が確認されている御宇田遺跡（山鹿市鹿本町）並びに同じく「コ」字に掘立柱建物群を持つ「上鶴頭遺跡」（菊池市七城町）などが知られてきた。

その後、平成に入りうてな台地上の圃場整備事業で一部で、うてな遺跡七枝地区から多数の堅穴建物と共に二十棟を超える掘立柱建物が検出され、三彩壺や銅椀片並びに墨書土器が出土するなど鞠智城から谷を一つ隔てた地域に官衙関連の集落が展開していたことも判明している。また、近年、鞠智城近くを通る官道の「車路」ルート近くで、鞠智城の存続期間都と被る九世紀初頭の掘立柱建物群を検出した赤星石道遺跡（菊池市）の調査がおこなわれるなど、鞠智城取り巻く遺跡が知られている。

このような現在までに知られている官衙的を持つ遺跡はすべて、凝灰岩台地の平坦地を選地するか、菊池川河岸段丘の平坦地を利用して立地している。これらは例外なく、他の役所や集落を見通す位置を選地しており、車地を通じ連携できる位置に選地している。

それに比べ鞠智城は現在知られている三つの城門はもとより、米原台地の建物群など、これらは他からの視点を遮断するか場所に建設され、かろうじて長者山、灰塚など「烽台」が置かれたであろう場所だけが周辺を遠望できるが、外部からその位置を正確に求めることは難しい。

それではなぜ、重要な官衙や拠点集落がうてな台地や河岸段丘上に造られてきたにもかかわらず、鞠智城だけは外から見えない低山地内に選地されたのか。おそらく、この選地こそが、古代山城築城





図1 周辺遺跡分布図

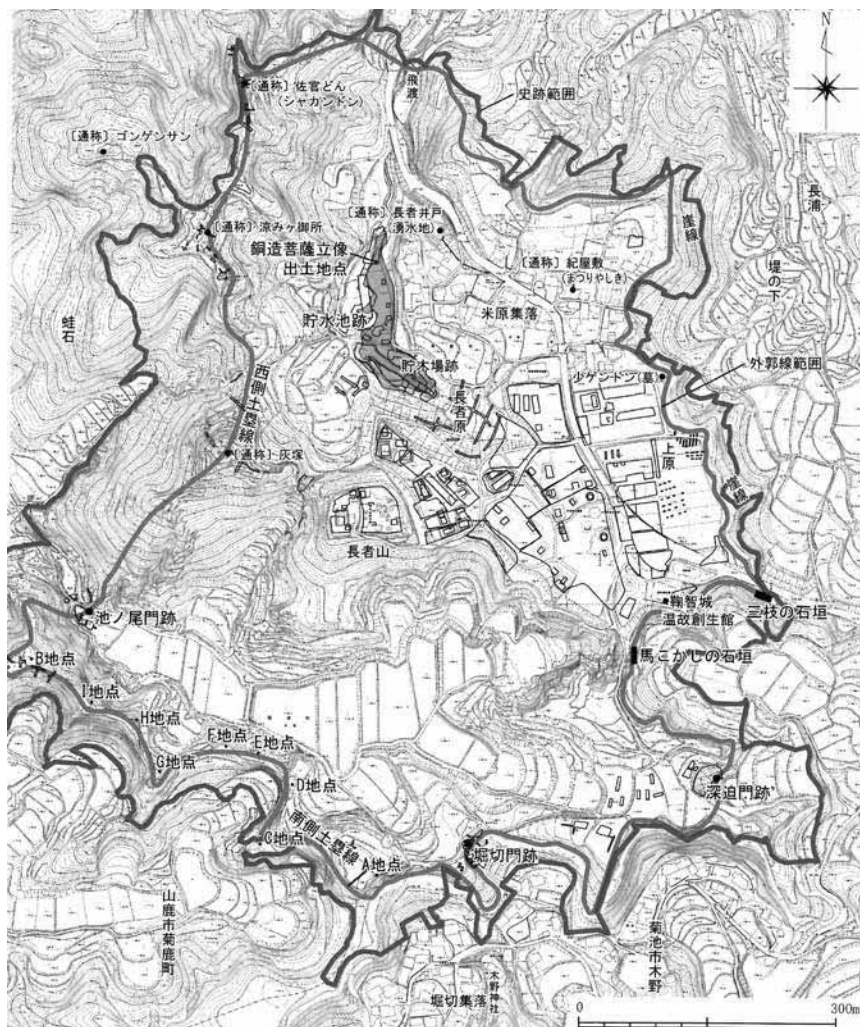


図2 鞠智城城域範囲

の渡来系官人による選地の重要な部分であったことが考えられる。

濱田耕策氏は平成二十一年の鞠智城シンポジウム<sup>1</sup>で、「鞠智城を「くくち」と読む『日本書紀』の古訓を糸口に鞠智城の築城者層について考察されており、筑紫の二つの山城と連携するこの鞠智城の「鞠智」が築城に際してその土地の選定に始まる築城プランナーとして城名に名を遺すほどの貢献をなしたものと考えられる」とし、百済官人のそれも上位の官位を持ち、佐平や達率を帯びた亡命官人の関与を指摘されている。このことから、選地が鞠智城の最大の渡来系技術（思想）そのもので、渡来系（百済）官人の関与を強く示唆していると考ええる。

## （二）城門

現在、鞠智城内で調査により確定している城門は三か所である。いずれも城域の南側土塁線上から西側土塁線にかけ、東から深迫門、堀切門、南側土塁線を経て池ノ尾門を認める。このうち、深迫門と堀切門は包谷式を取る選地の条件から、周囲の平坦地もしくは車路へ抜けるルート上には深い谷を有し、起伏の大きな進入ルートしか想定できない。唯一、西を向く池ノ尾門は菊鹿盆地を横切る車路や、河川交通として川湊が想定できる菊池川や木野川から谷を隔てることなく進入することができ、城外から城内中心部まで進入できる最も起伏の少ない城門である。城内に搬入される米をはじめとする物資の搬入口としての役割を担っていたと考えられる。また、のちに報告するが貯水池から出土した鞠

智城初の文字資料である木簡も荷札として付けられた状態でこの城門を經由し持ち込まれたものと考ええる。

また、この池ノ尾門は、現在の福岡県八女市から国道三号を經由する岳間溪谷を辿ると最短距離で大宰府方面とを結ぶルートとなる。現在知られている車路・延喜式官道で想定されているルート上には乗らないが、大野城・基肆城の後方支援基地としての役割を考えるとこのルートの存在も生きてくる。更に、鞠智城には城域の北側、現在の米原集落近くに北門の存在も指摘されている。これまでの調査では確認されていないが福岡県方面に向けての城門があってもおかしくはないと考える。

そこで城門がなぜ、渡来系の技術と考えるかだが、同じく朝鮮式山城として築城された大野城・基肆城と同様、城門は単独で存在するものではなく、土塁線上にあり土塁と連携することで城としての機能を有する存在として城門はある。深迫門では城門を挟み込むように谷地形の中まで土塁が迫っており、その延長として城門が造られている。

城跡を考える上で重要となる定義の一つに、岡田茂弘氏<sup>2</sup>が示された「城跡」と判断する基準を、「防御的構造物Ⅱ自由な出入を規制する施設の遺構の存在」とすると、城門と土塁の連続性に強い防御的思想を見いだし、同じ構造を持つ大野城・基肆城と同様にこの当時の国内の築城思想から派生した施設ではなく、朝鮮式山城に不可欠であると考ええる。



図3 城門位置図

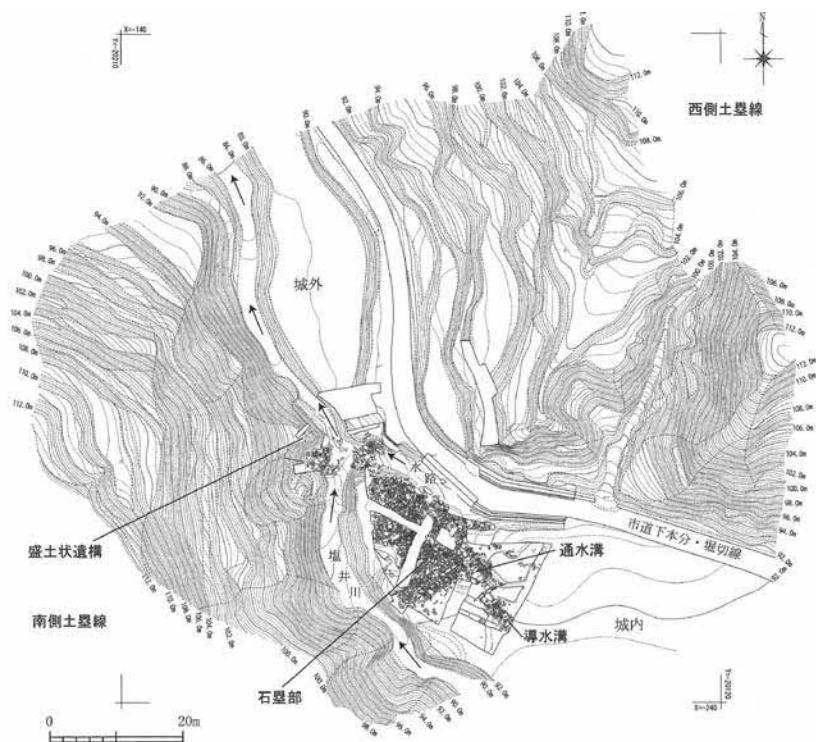


図4 池の尾門周辺地形図

### (三) 土塁線

鞠智城の土塁線として南側・西側土塁線が知られていることを先述した。土塁と城門が組み合わさることにより、城の防御的構造物となる。さらに、この両土塁には、古代山城で初めて取り入れられた築城手法である「版築」技術が用いられており、これまでの発掘調査で中国・朝鮮半島の築城技法が明らかにされている。

南側土塁線は、堀切門跡から西方向に延びる標高百二十m（百三十mの丘陵頂部に位置し、総延長五百mの区間である。丘陵南斜面は、裾部との比高差が二十m

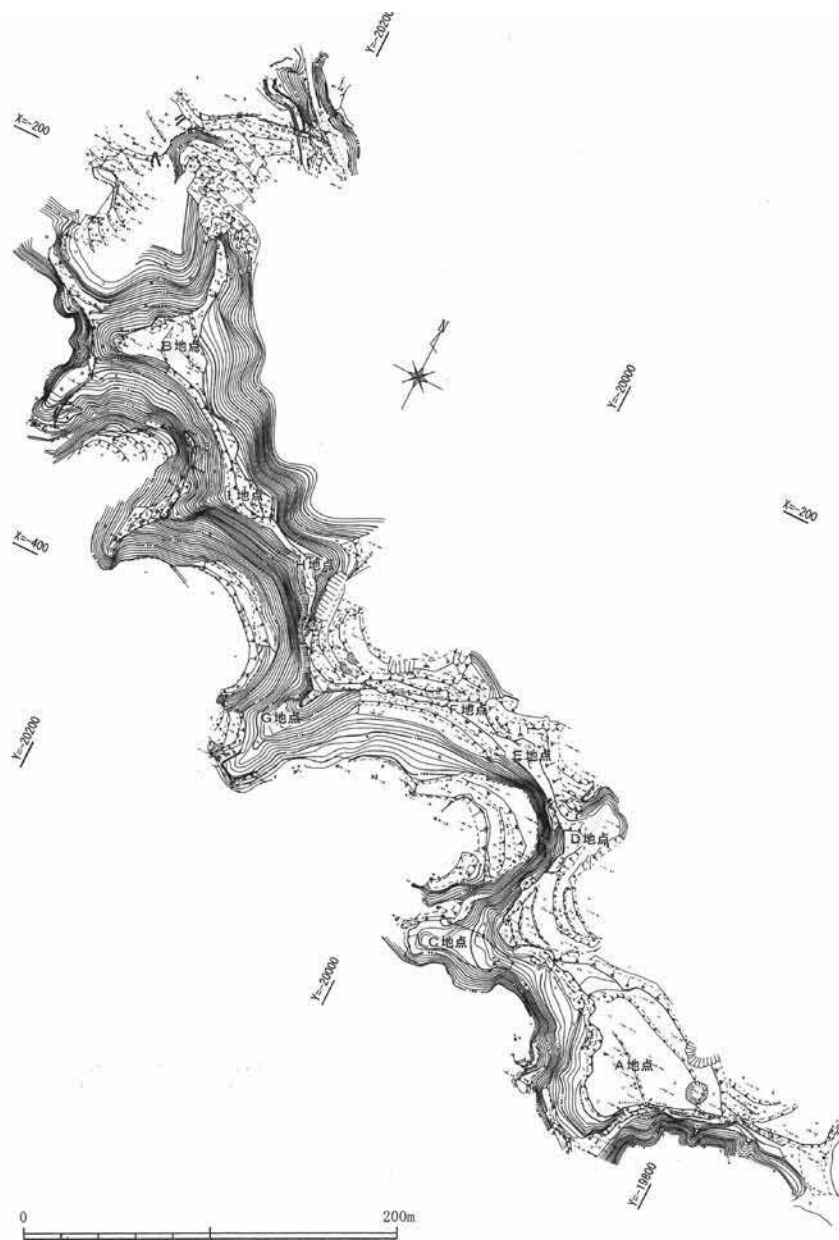


図5 南側土塁線

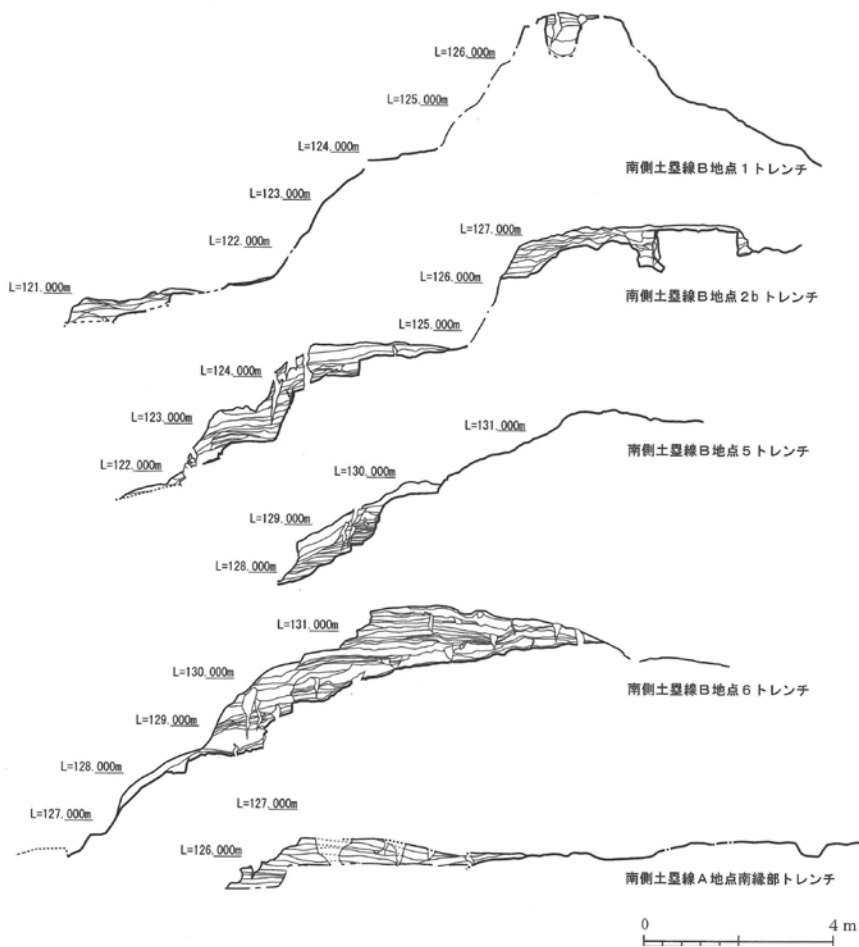


図6 南側土塁線断面



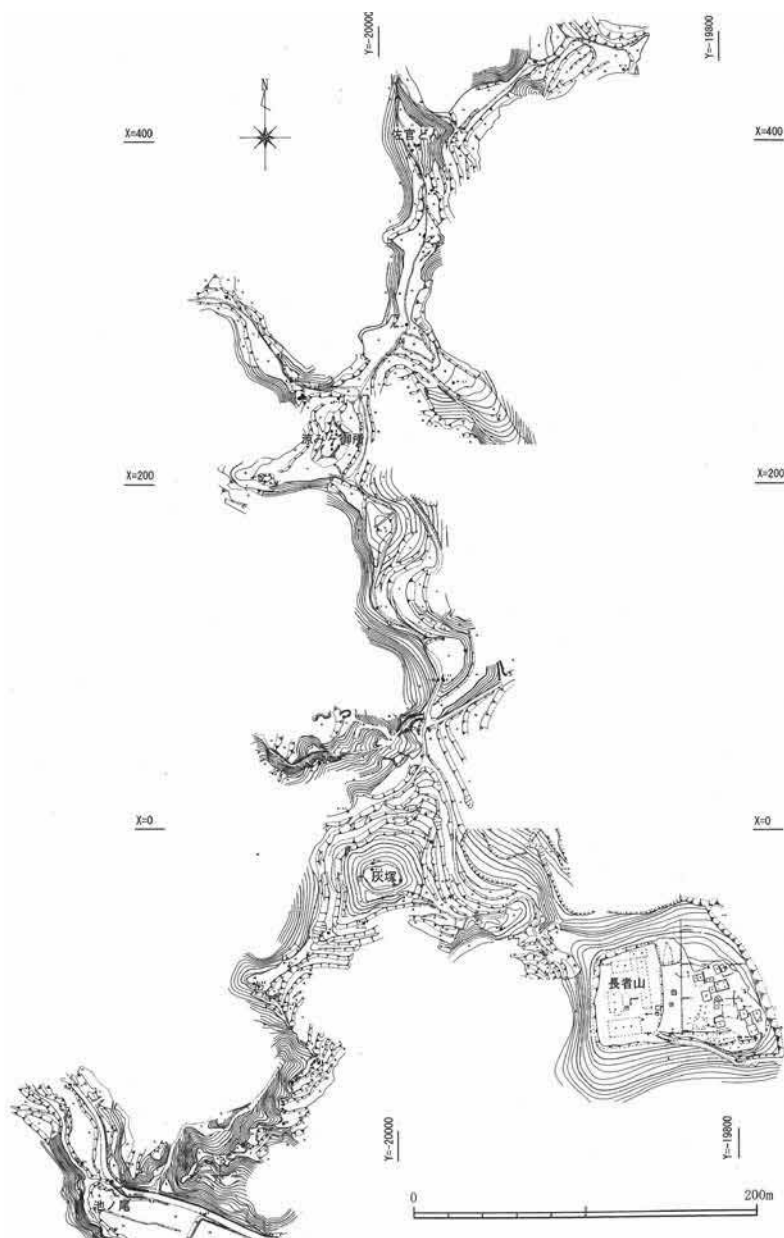


図7 西側土塁線

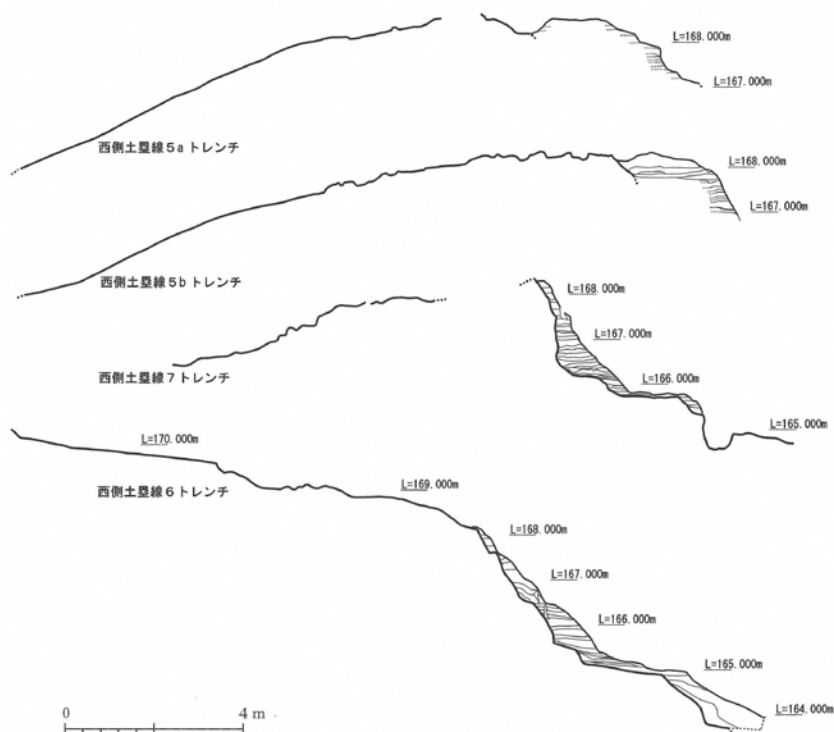


図8 西側土塁線断面

三十mに及び、阿蘇溶結凝灰岩の切り立った崖を形成しており「屏風岩ライン」と呼ばれる地点も含んでいる。

また、西側土塁線上は、長者原地区の西端（標高百五十五m）から北方向に延び、標高百五十m～百七十mの丘陵頂部に位置し、総延長約五百mの区間である。土塁線は馬の背状の尾根が、通称「灰塚」、「涼みヶ御所」、「佐官どん」といった頂を繋ぐように連続し、南から北に徐々に標高を上げていく。発掘調査では「佐官どん」で版築土塁が確認されている。

#### (四) 貯水池跡

長者原地区の東側、米原集落の西に所在する谷部から、平成八年（一九九六年）に調査に着手し国内の古代山城では岡山県の鬼城山（史跡鬼城山跡・岡山県総社市）と鞠智城でしか確認されていない城内に所在する貯水池を確認している。調査の結果、鞠智城では総面積約五千三百㎡に及び、池跡からは後に触れるが多彩な遺物も出土している。

古代山城における貯水池は、全赫基氏<sup>3</sup>により古代山城の類例から古代朝鮮の山城における「集水遺構」と類似遺構であるとし、池跡からの出土遺物の特徴とも合わせ、そのルーツは古代朝鮮の築城技術の一つとして捉えられている。

また、貯水池跡の調査では、堤防状遺構の断面から「敷粗朶工法」とみられる低湿地における地盤を強化する技術も確認されている。この技術は鞠智城に先行して渡来系官人の指導により築城された記録の残る水城（特別史跡水城・太宰府市ほか）で用いられ、軟弱地盤上に大堤が築かれている。

#### (五) 建造物等

鞠智城の長者原・上原地区では合計七十二棟の建造物を確認しているが、うち二か所で八角形建物跡を四棟確認している。北側の30・31号建物では、心柱を中心に八角形状に配された柱が二重に巡り、掘建柱から礎石への建て替えが確認されている。また、南側では、心柱を中心に八角形状に配された

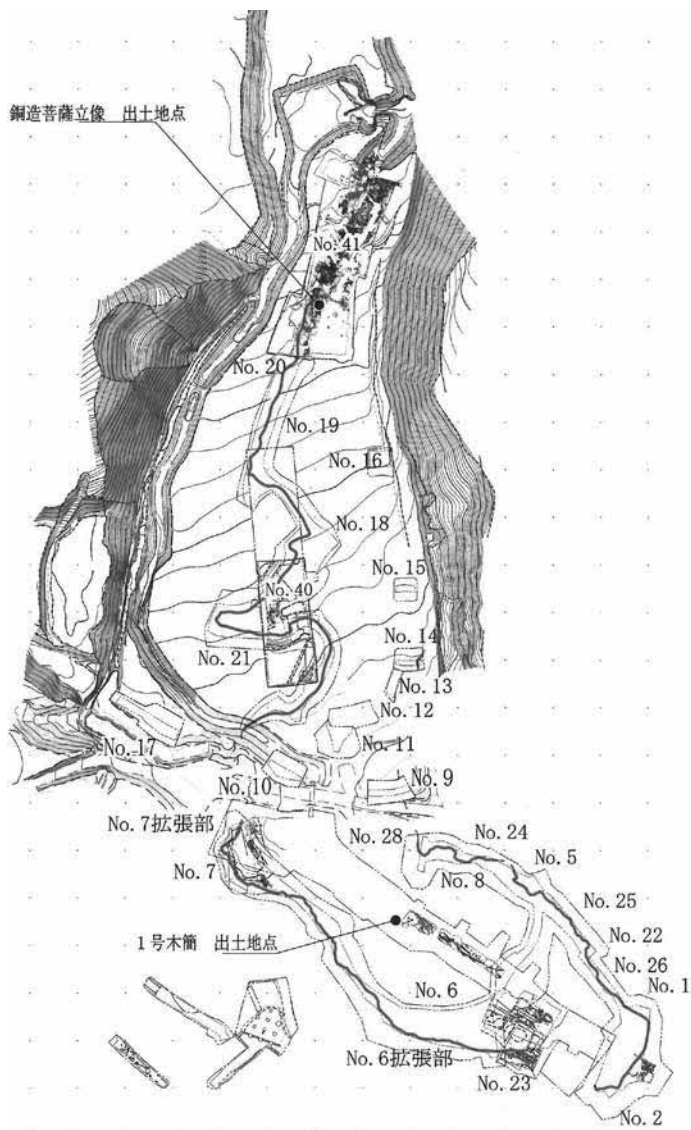


図9 貯水池調査区

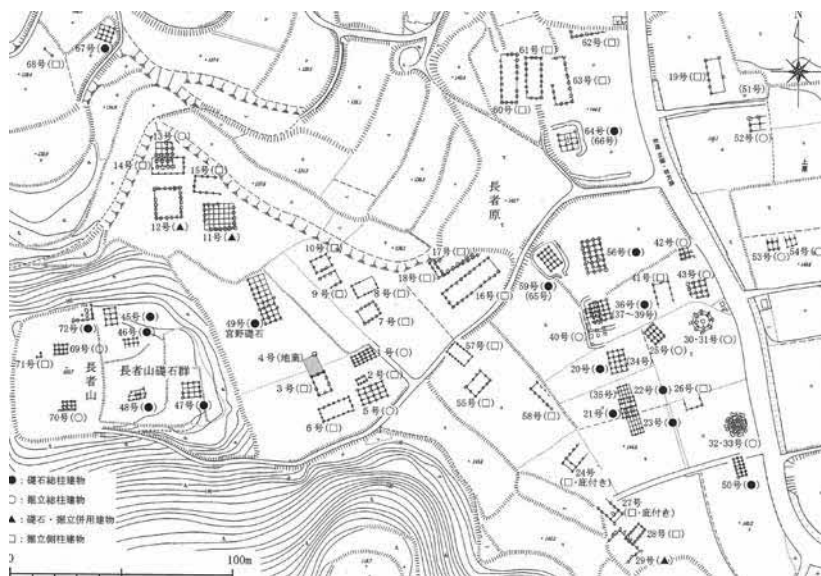


図 10 長者原地区遺構配置図

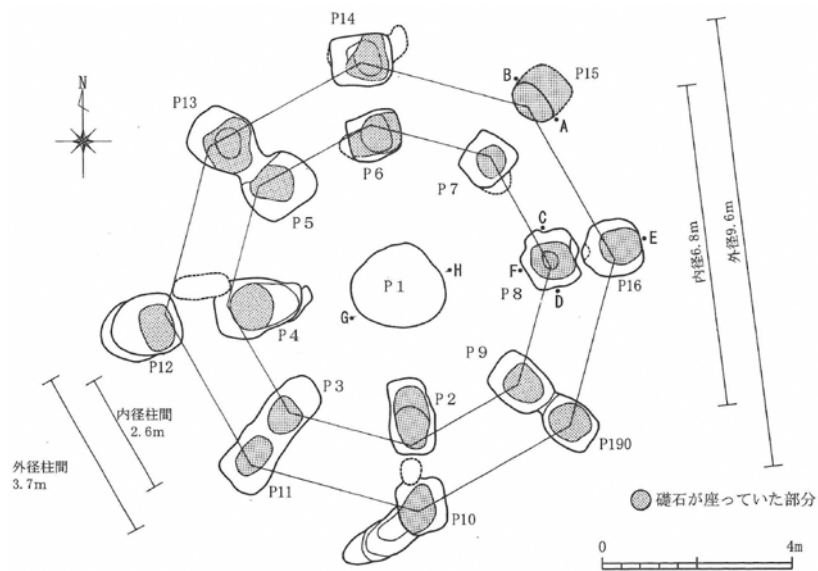


図 11 31・32号建物

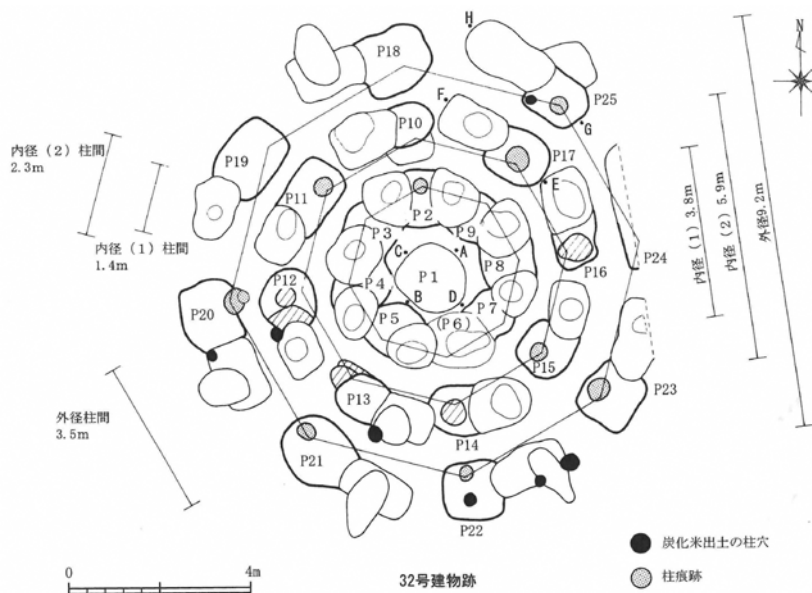


図 12 32号建物

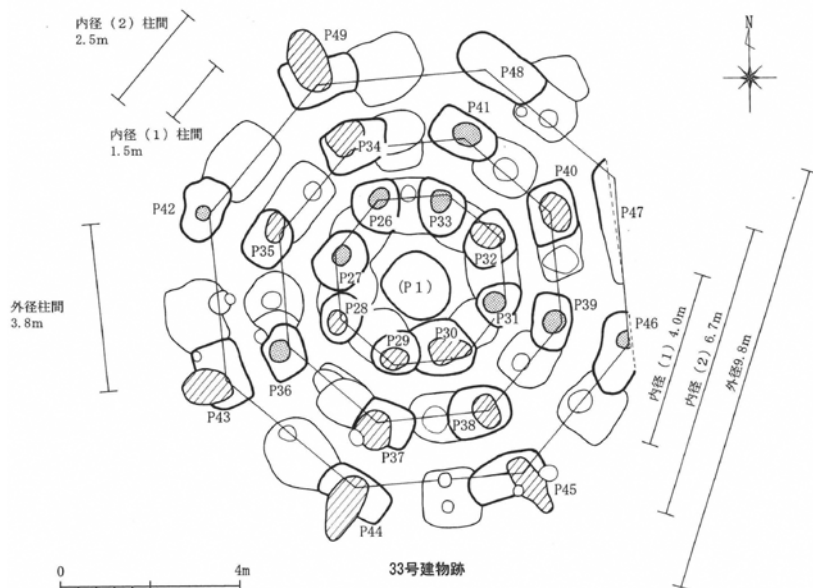


図 13 33号建物

柱が三重に巡り、こちらも掘建柱から礎石への建て替えが確認されている。八角形建物は八世紀前半、鞠智城第Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられ官衙的役割を持つ建物群が立ち並ぶなど、当初の城としての機能から役所的機能へと変化する時期に属すると考えられる。近年、多角形建物は国内の官衙的性格を持つ遺跡等から複数の検出事例があるが、古代山城からの検出事例は鞠智城に限られている。

## (六) 出土遺物

### ① 瓦

鞠智城では、軒丸瓦・丸瓦・平瓦の三種類の瓦が、大小の破片を含めて合計一万九百点余り出土している。軒丸瓦には、「単弁八葉蓮華文」と呼ばれる蓮の花をかたどった文様が施されているが、これは朝鮮半島の瓦文様の影響を受けたものと見られる。

### ② 銅製菩薩立像

銅製菩薩立像は、貯水池跡の池尻部から出土した。柄（下部の突起部分）を含む高さ十二・七cm、幅三・〇cmで、横から見ると体部がS字曲線を描いている。顔の表情は丸みを帯び穏やかで、三面の宝冠、肩まで垂らした垂髪、両肩にかけられた天衣などもよく表現されている。また、舍利容器とも考えられる持物を、へその前で両手で抱えるように持っている。

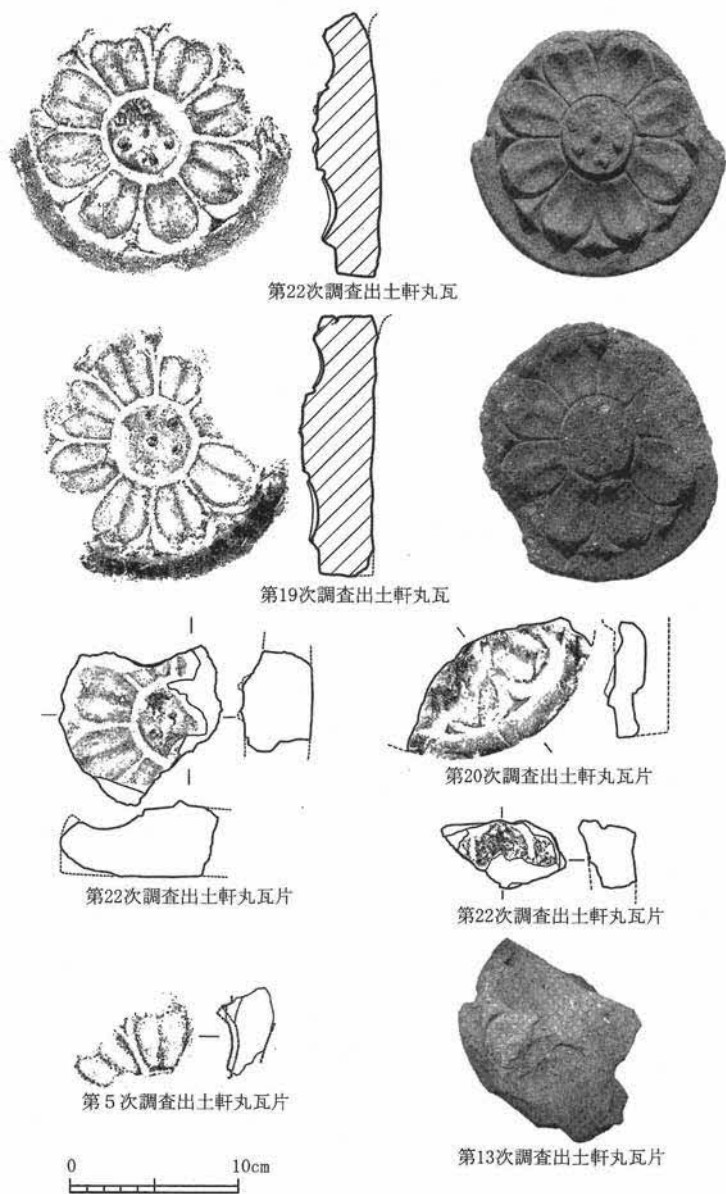


図 14 軒丸瓦瓦当



この仏像は、七世紀後半の百済仏の特徴を持つことから、朝鮮半島の百済でつくられ日本に持ち込まれた可能性が高いと考えられている。

### ③ 木簡

木簡は貯水池跡の水分が多く、粘性の高い土中から出土した。短冊状の木の板に墨で「秦人忍□（米カ）五斗」という文字が書かれており、古代に秦人忍（はたひとのおし）という人物が税として納めた米に結び付けられていた荷札であると考えられる。上部には左右から切り込みがある。この切り込みの形状は九州の木簡に多く見られる形態を示している。

## 二 発掘調査から見てきた鞠智城に遺る渡来系技術

鞠智城に用いられている築城技術並びに出土遺物には多くの渡来系技術が存在することがこれまでの調査・研究から分かっている。特に鞠智城には国内の古代山城にはない八角形建物やこれも事例の少ない貯水池跡の存在などが認められるので、まだ研究の余地を多く残す古代山城であるといえよう。



図 15 貯水池跡出土木簡

最後に、本県では、現在、海外から世界的な半導体受託製造大手の菊陽町進出が決まった。これほどの企業がなぜ、進出先として熊本を選地したのか。今回の事例が、これまで鞠智城がなぜ現在の山鹿市・菊池市に跨る米原台地を築城先として選地したのかに大いに考えさせられるきっかけを与えてくれた。

現在、半導体製造大手の進出先周辺は北側に大分方面と九州縦貫道とを結ぶ高規格道路の交通インフラの整備が進み、また、熊本県・周辺市町村が長年整備してきた工業団地及びそこに進出している国内関連メーカーの存在など、他地域に比べ進出すべき条件が整っていたことが熊本の地が選地された理由であると考ええる。

この在り方は、七世紀代に鞠智城が現在の山鹿市・菊池市に選地され、築城された経緯とも重複すると考える。車路など官道の整備、菊池川を中心とする河川交通の整備など大宰府との連携を目的としたインフラの整備が整っていたこと、また、これは今後の課題になるが鞠智城が築城される七世紀代に周辺に鞠智城と連携を図る官衙的存在があつたことが、鞠智城がここに選地された要因である可能性が高いと考える。

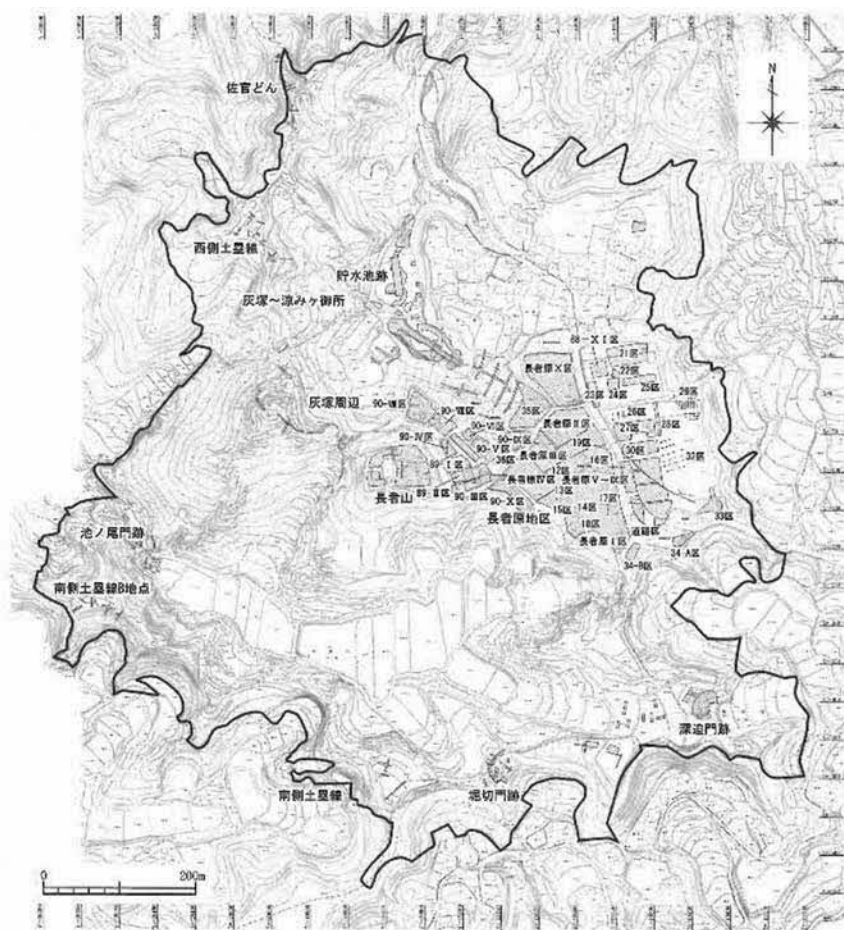


図 16 鞠智城城域及び遺構配置

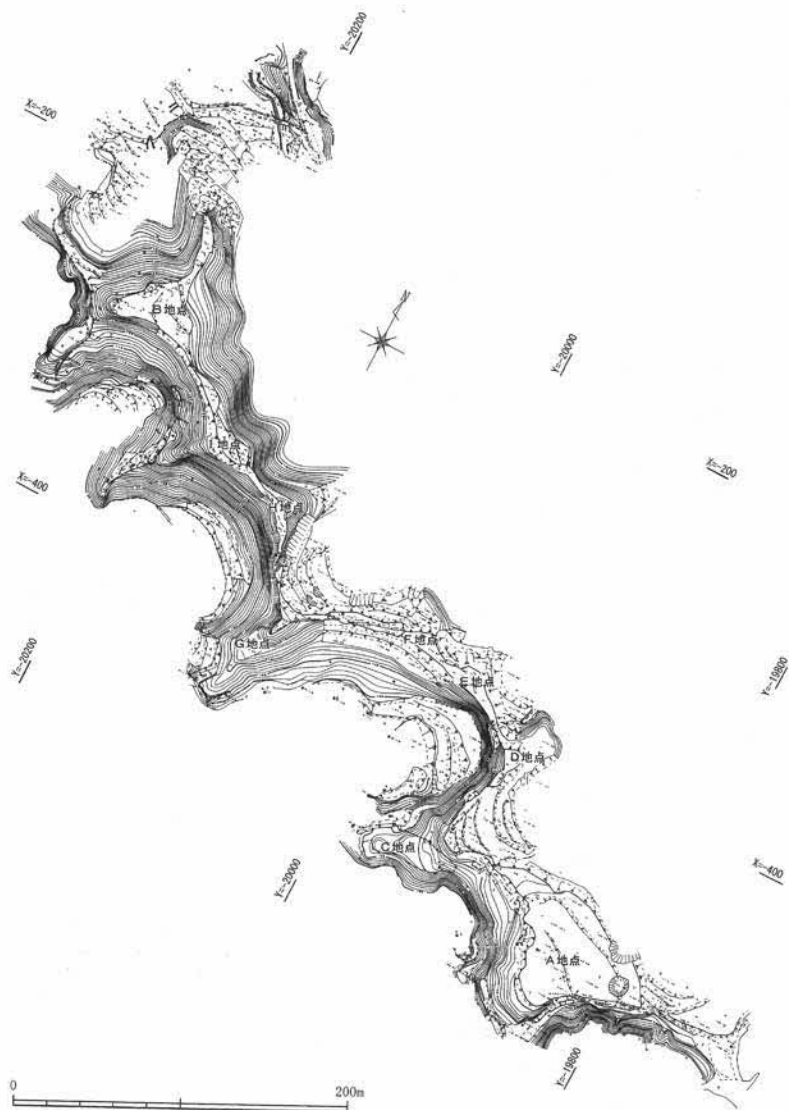


図 17 南側土塁線

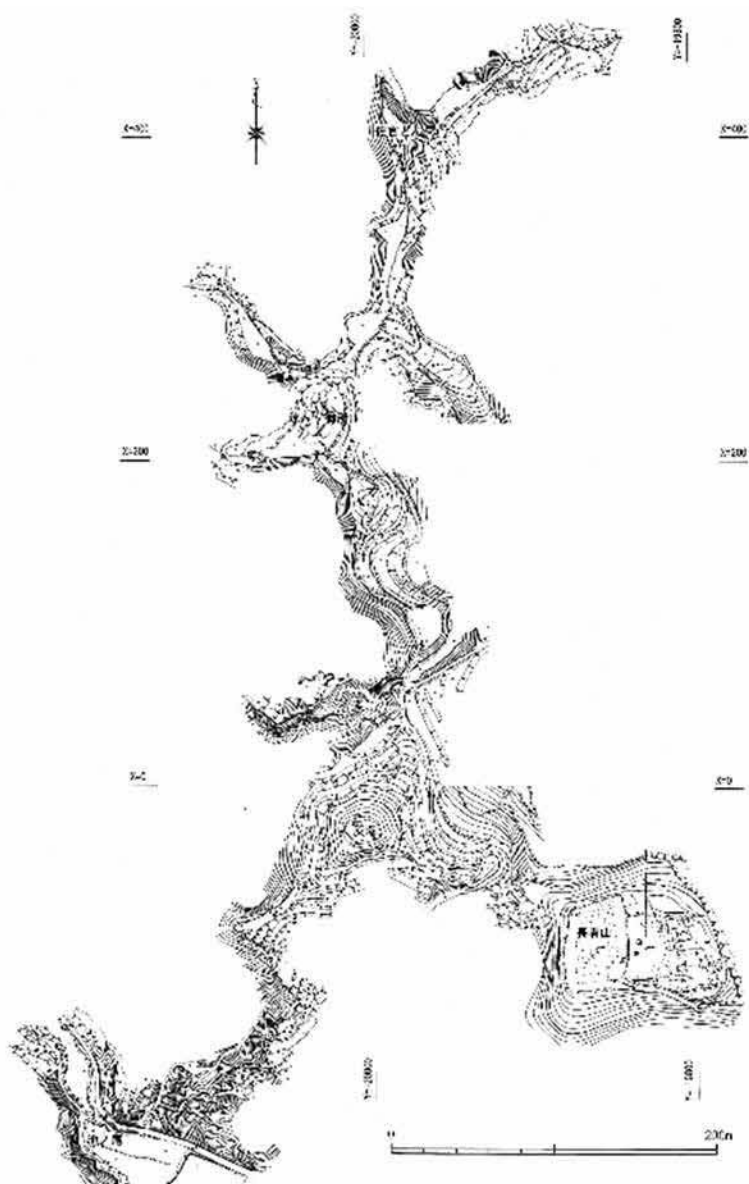


図 18 西側土塁線

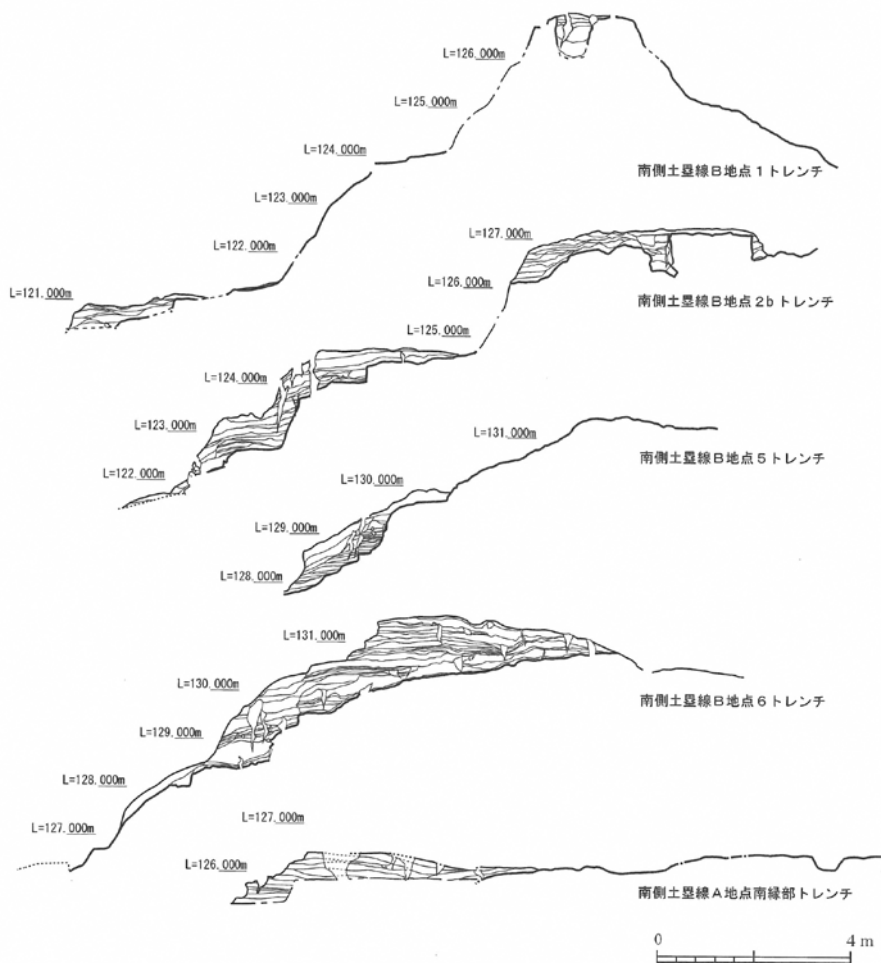


図 19 南側土塁線トレンチ断面

## 【引用文献】

- 1 濱田耕策「朝鮮古代史からみた鞠智城」『古代山城 鞠智城を考える』鞠智城東京シンポジウム報告書（二〇〇九年）熊本県教育委員会
- 2 岡田茂弘「古代山城としての鞠智城」『鞠智城を考える』二〇〇九東京シンポジウムの記録（二〇一〇年）山川出版社
- 3 全 赫基「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」『鞠智城と古代社会』第十号（二〇二二年）熊本県教育委員会

## 【参考文献】

- ・『史跡鞠智城跡保存管理計画書』（二〇一五年）熊本県教育委員会
- ・『第三次鞠智城跡保存整備基本計画』（二〇一六年）熊本県教育委員会
- ・『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第八次―第三次調査報告―』（二〇一二年）熊本県教育委員会
- ・『鞠智城と古代社会』第一号（二〇一四年）第十号（二〇二二年）熊本県教育委員会
- ・『築城技術と遺物から見た古代山城―発表資料集―』（二〇一六年）熊本県教育委員会
- ・『鞠智城とその時代―平成十四―二十一年度「館長講座」の記録―』（二〇一一年）熊本県教育委員会
- ・『鞠智城とその時代―平成十四―二十一年度「館長講座」の記録―』（二〇一四年）熊本県教育委員会
- ・『鞠智城跡Ⅱ』論考編一（二〇一四年）熊本県教育委員会
- ・『鞠智城跡Ⅱ』論考編二（二〇一四年）熊本県教育委員会